

「死者の博物誌」 (ヘミングウェイ)

博物學者の觀察領域から戦争が常に除外されてゐる様なので、自分が死者に纏はる「合理的にして面白い事實」を提供して、その空隙を埋めるべく努めてみよう、さう語り手は前置きして、まづ十八世紀の「忍耐強い旅行家マンガ・パーク」の逸話を紹介する。マンガ・パークは廣漠たるアフリカ砂漠を旅行中、力盡きて倒れさうになり、身を横たへ死を待つばかりと觀念したその時、眼前に「異常に美しい小さな苔の花」が咲いてゐるのを見て、かう思ふ、「世界のこんな片隅につまらぬものとしか思へないものを植ゑ、水を與へて立派に育て上げたその神が、神の姿にかたどつてつくつた人間の難澁する有様に無關心であるはずがあらうか」。マンガ・パークは氣力を振り絞つて前進し、命拾ひをする。語り手は云ふ、マンガ・パーク同様の「感嘆と崇拜の心」があるならば、博物學のいかなる分野の研究であれ、我々「一人々々が人生の荒野を旅するにあたつて皆必要とするあの信仰・愛・希望をきつと深めてくれるに」違ひ

ない、然らば「死者からどんなインスピレーションが得られる」であらうか。

以下、戦場に於ける死の種々相が列擧されるが、それらは「信仰・愛・希望」を深めてくれるどころではない。脚を叩き折られ棧橋から突落されて溺死した軍馬、高性能爆薬で爆破され四肢が引きちぎられた軍需工場の女達、埋葬される迄に色が變つたり氣球よろしく膨張したりするコーカサス人種の死體、「獸みたいな死に方をする」人間達、更には酷暑の熱氣、蠅の大群、臭氣等々。最後に語り手は云ふ、かかる戦場にあつてマンゴ・パークと同様に考へる旅行者が果してゐようか。

作品の掉尾を飾るのは、最前線の救護所に於ける悶着の寸描である。頭蓋を碎かれ近くの死體置場で呻く瀕死の兵士を、救護所で何とかしてくれまいかと擔架兵が軍醫に頼み込むが、他の負傷兵の治療に忙殺され、しかも兵士の助かる見込みが無いと知る軍醫は拒絶する。見てゐた將校がモルヒネを打つてやつたらしい、と口を挟むが、治療に使ひたい軍醫はそれも拒否する。將校が兵士を「苦しませるにしのびない」と云ふと、それなら射殺して來いと軍醫が云ふ。「君は人間ぢやない」と將校が叫ぶ。負傷兵の手當が俺の仕事だ、兵士には「できる限りのことはしてやつたんだ」と軍醫が應じる。「人でなし」と叫んで將校が詰め寄ると、軍醫は

ヨードチンキの皿を投げつけて目潰しを喰らはし、將校を床に抑へつける。そこに擔架兵が入つて来て、兵士が死んだと告げる。軍醫は將校に向つて、聞いたらう、「戦時には、お互ひに、無駄な争ひをするものだ」と云つて手當をしてやる。

前回取上げたピアスと同じく、ヘミングウェイも好んで戦争を描いて、「信仰・愛・希望」を裏切る否定的現實を容赦無く剔抉した。彼等のペシミズムは共に徹底してゐたが、その一方、ピアスが戦場にこそ人間の「悲劇的尊嚴」の證しを見出したのと同様、ヘミングウェイも軍人や鬪牛士やボクサー等々、戦ふ男達の壯絶な生き方の中に人間肯定の證しを求めた。彼がスペイン戦争の體驗を描いた「誰が爲に鐘は鳴る」に於て、主人公ロバート・ジョーダン「前線に近附けば近附くほど、良い人間が多くなる」と云ふが、「死者の博物誌」の軍醫にしても、「人でなし」と罵られようが修羅場の中で己が存在理由に飽迄忠實たらんとする作者好みの「良い人間」に他ならない。これを要するに、ピアスを讀んでもヘミングウェイを讀んでも、吾々はベルジャーエフの云ふ「美德と惡徳とが重なり合ふ（中略）甚だ複雑な道德的現象」たる戦争の本質を篤と知らされる事になるのである。